

事例集

事例① **地域組織の中に、志のある人が気軽に参加できる、
市民参加型の委員会をつつた <中京区城異学区>**

「個人の思いを大切にした有志の組織が地域をつなぐ」

地域活動の担い手不足は、全国的な課題です。

京都でも「自治連の役員は高齢化で、なかなかアイデアが出ない。」「まちづくりといっても、自治会の担い手不足は深刻やな・・・」などの声をよく聞きます。

その一方で、「NPO の活動は何してるのかわからん。」「有志で集まったグループは、好きなことばかりやってる。」などと、新しい動きには不安の声もよく聞かれます。

中京区の城異学区では、「城異五彩の会」という有志による組織が、自治組織と絶妙なバランスのもと、地域のつながりづくりに取り組んでいます。

オープンカフェを運営する地域のまちづくり組織・城異五彩の会

城(しろ)の巽(たつみ)という名前は、二条城の巽＝辰巳(南東)の方角をあらわすように、城異学区は二条城の南東側に位置します。この学区では秋になると地区内を東西に横切るシンボルロード・御池通でオープンカフェが毎年開催されます。

2008 年は御池通の沿道学区・事業者を中心とした「OIKE Festa」に合わせて開催され、ホテルがコーヒー、フレンチのレストランがビールや料理、学区住民は無農薬の野菜、園芸のグループが花の苗、ボランティアの会が福祉施設の作品を販売しました。飲食しながらステージのブルースやマジックショーを楽しめるオープンカフェ周辺は、実にバリエーション豊かな出店内容となりました。2001 年の初開催から、今年で 9 回目と、継続的に開催しています。



オープンカフェのステージ



似顔絵描きのコーナーも

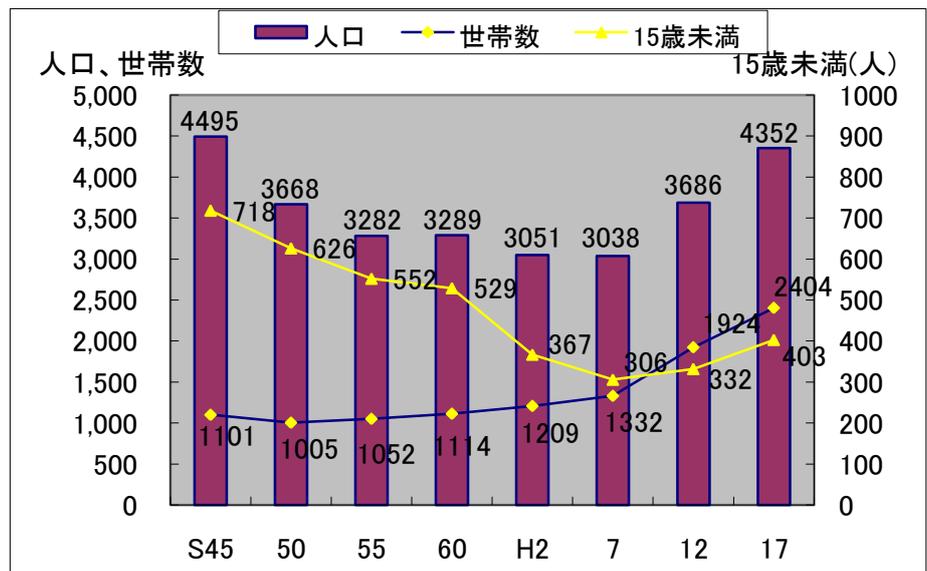
有志の参加による会の設立 ～近隣からの刺激と行政からの働きかけをきっかけに～

この事業を企画し実行しているのが、城巽学区のまちづくりを考える会「城巽五彩の会」です。「職、住、遊、学、交」の5つの彩のまちづくりをモットーに平成13年に設立されました。直接のきっかけとしては、その前年である平成12年に、中京の中心エリアの各学区が協力する形で生まれた「歩いて暮らせるまちづくり協議会(以降『あるくら』と表記)」による「まちなかを歩く日」が開催され、それに参加した隣接する本能学区や三条通での取組から刺激を受けたことです。その背景には、堀川に接するこのあたりの地域は昔から京染めが盛んで染め工場が多かったのですが、和装産業の衰退とともに工場が閉鎖され、跡地にマンションが建ち並ぶようになり、地域のコミュニティの希薄化が課題となっていた状況があります。

そこに『あるくら』の担当課である京都市の都市計画局や(財)京都市景観・まちづくりセンターから次年度の「まちなかを歩く日」への参加呼びかけや「まちづくり委員会」設立の働きかけがあり、城巽学区でも何か取組ができるのではないかと検討されたのです。

ちょうど『あるくら』の取組を目にしていた自治連会長は、城巽学区の直面しているコミュニティの希薄化の課題に対してまちづくり委員会の設立

の有効性を感じましたが、既存の自治連で担うのは難しいと考え、福祉活動を中心に新しい活動に取り組み始めていた人などに呼びかけ、何度か意見交換会や準備会を開きました。その中では、これまでのように町内会の代表を集めるようなやり方では新しい活動を行うことは難しいことや、まちづくりには個人のモチベーションが大切であることなどが確認され、団体や町内会の代表ではなく個人の立場での参加による組織の設立を目指すこととなり、平成13年9月に「城巽五彩の会」として設立されました。



城巽学区 人口・世帯数・子ども人数の推移(国勢調査より)
平成7年あたりから人口・子ども人数ともに増加傾向であることがわかる。

イベントから地域のつながりの構築へ

活動はまず、「まちなかを歩く日」でのオープンカフェの実施から始まりました。冒頭に紹介したのは近年の姿ですが、初期のころは、学区内の神社・稲荷やホテルなど計7か所でお茶席やカフェを設け、それらを歩いてめぐってもらった企画でした。城巽学区の中には歴史的な遺産・史跡がたくさんあり、学区の住民にとってもそれらを再認識することで、城巽学区を見直すことになりました。

何度かオープンカフェのイベントを経るなかで、もともとの五彩の会の設立の趣旨でもあった「コミュニティの希薄化」という課題に対しての取組も始まってきました。

まずは、「子どもが地域で育つ」という視点において、現在の子どもたちの遊び場の少なさが話題になり、昔の子どもと今の子どもの遊び場の調査を行いました。その結果、昔の遊び場はほとんど路上で、わざわざ公園に行くことは少なく、8割が城巽・本能・龍池・明倫の隣接4学区内で遊んでいたことがわかりました。それに対して、今の子どもの遊び場は、ほとんどが学校や公園などの施設であり、場所も隣接4学区以外が8割と、全く逆の結果となりました。道路に車があふれるようになり、子どもが路上から追い出されたことに加え、小学校が統合されたことにより子どもの通学圏が広がったことが影響しているように思われました。この結果を受けて、道路を車両通行止めにして路上や神社の境内で遊びを行う「昔遊び」の会を行い、子どもたちが学区の高齢者から竹鉄砲やこま回しなどの遊びの手ほどきを受けました。

また、マンション建設とともに学区に子どもが増え始めたのですが、新しく住み始めた世帯が町内会に入っていない例も多く、その世帯の子どもは町内の地蔵盆に出席することができないという状況も出てきました。そこで、「マンションの子どもたちのための地蔵盆」を自治連が主催する形で始めたのです。もちろん企画・実施は城巽五彩の会が全面協力です。会場の自治会館はたくさんの子どもたちで埋まり、長い数珠も子どもたちだけで回すことができました。



昔遊び(竹鉄砲)



マンションの子どもたちのための地蔵盆

また、防災・防犯の観点からのマップの作成、マンション住民とのつながりを豊かにするためのマンションの実態調査なども行ってきました。

有志による組織である城巽五彩の会は、動きのよさが求められるイベントの実施が得意であり、自治連が主催の城巽まつりや堀川灯ろう祭りの手伝いはもちろん、音楽フェスティバルを開催するようになり、これも秋の定番イベントとなっています。

さらに現在では、新しく城巽学区に住む人に、学区のことをもっとよく知ってもらうために、学区の歴史・文化・産業などとともに自治連や各種団体の活動紹介を盛り込んだ地域紹介紙を自治連で作成し発行の予定で、この実質の作業を城巽五彩の会が担っています。

城巽五彩の会の特徴

このように自治連などの既存自治組織ではなかなかできない取組を、次々と実施する城巽五彩の会には以下の特徴があります。

特徴1 有志ならではのモチベーションの高さ・参加のしやすさと、自治連のお墨付きによる信用の両立

設立時に城巽五彩の会初代会長がこだわった点でもありますが、有志による会ということは、個人として

の参加であり、個人の思いを活かしやすい組織です。新しいことを企画するとき、個人の思いがエネルギーとなる場面は多くあります。また、思いさえあれば参加できるということで、参加の敷居が低くなり、新しくまちにやってきた人を巻き込みやすいというメリットもあります。

一方、城巽五彩の会の場合、そこに自治連会長が深く関わっていることで、自治連のお墨付きが得られています。また、初代会長は地域で福祉活動をされてきた方なので、地域住民から信用を得やすかったということもあります。一般に、NPO などの新しい団体と地域の既存団体の連携の難しさが指摘されることがありますが、城巽五彩の会の場合、NPO に特徴的なモチベーションの高さ・参加のしやすさと、既存団体に特徴的な地域住民からの信用と、両方の良さを備えた組織であるといえそうです。

特徴2 外部の力をうまく使う

イベントにはたくさんの人、特に学区の住民でない外部の力をうまく使っています。その一つは、城巽中学校の同窓生による「心町衆」というグループです。城巽学区では戦前に小学校がなくなり、戦後すぐ学校制度が変わったときに城巽中学校となり、それから 50 年以上、城巽・龍池・本能・明倫の各学区の中学生が通っていました。その卒業生が結成した「心町衆」が、オープンカフェ、昔遊び体験、音楽フェスティバルなど城巽学区の様々なイベントを手伝います。他にも、イベントを盛り上げるハワイアンやアフリカンなど様々なジャンルのバンド、音楽高校の生徒、城巽をフィールドに研究したいとやってくる大学生など、協力してくれそうな外部の力をすぐに取り入れています。

特徴3 行政からの働きかけを利用する

地域コミュニティの希薄化という大きな課題は、日常生活では気づきにくいほどゆっくり静かに進行するので、住民の日々の生活では忘れられがちになります。

城巽学区の場合は、『あるくら』による近隣学区からの刺激と、行政からのまちづくり委員会設立の働きかけがあったために、このような組織の立ち上げにつながりました。行政からの働きかけをのがさずに、学区で話し合いができたことも重要なポイントです。その意味では、行政との窓口となる自治組織の役員（城巽学区の場合は自治連会長）が、行政からの刺激をうまく地域組織の活性化に活かしたともいえます。

城巽学区で直面している課題「地域コミュニティの希薄化」は、京都のたいていの地域で直面している課題です。その解決にあたって、城巽五彩の会のような個人の思いを大切にしたい有志の組織を作ってみてはいかがでしょうか？有志によるモチベーションの高さ・参加のしやすさと地域からの信用の両立、これにより今までとは違う一歩が踏み出せるかもしれません。

事例② まちづくりアドバイザーが地域に入り、 学生も参加してまちおこしに取り組んだ <北区小野郷学区>

「～小野郷学区の将来に向けて～ 学生との交流から始まる未来への一歩」

「若い世代に参加してほしい」、「外部の若い世代にサポートしてもらえれば・・・」。

地域のまちづくりに関わる中で、こうした声をしばしば耳にします。

一方、

「ほんとうにうまくやっっていけるの?」「お世話が大変では?」

というギモンをもたれている地域も多いのではないかと思います。

ここでは、地域をもっと元気にしたい、次の世代に伝えていきたいという希望をかたちにするために、まちから来た若い世代とともに取り組んだ、北区小野郷学区のみなさんの「まちづくりの一歩」を紹介します。

個別の課題から、まちづくりへ。

小野郷学区は、京都市北区の北部山間地域にあり、豊かな自然と由緒が伝えられる歴史と文化に彩られた地域です。農林業を中心とした産業に支えられた地域ですが、現在は主要な産業である林業の低迷とともに、若年層の流出などにもなう少子高齢化も大きな課題となっています。

また、地域医療の拠点となる診療所を運営する「小野郷医療専門委員会」、夏祭りや岩戸落葉神社のライトアップなど、小野郷学区自治会を中心に地域住民の手で地域の活性化を図る取組が進められてきましたが、地域の少子化は進み、平成19(2007)年4月から小野郷小学校が休校になりました。地域の中心であった小学校を今後どうしていくか、地域のみなさんの中ではさまざまな検討が進められ、高齢化に対応した福祉施設への転換も考えられました。

一方、小野郷学区では多くの方が高齢になっても地域で元気に暮らしておられ、自らの家でずっと暮らしたいという思いをもつ方も多くおられます。またみなさんの思い出が詰まった小学校は、地域の将来を考える上での大きな可能性をもったよりどころでもあります。そこで北区役所・北区社会福祉協議会の協力を得て検討を進めた結果、小学校の活用については地域の将来を見据えたまちづくりという視点から考える方向性が共有され、地域ぐるみで小野郷学区の活性化に取り組んでいくこととなりました。

ではその次をどのように進めていくか。地域住民の思いや希望を集め、将来に向けて地域全体で取り組むために、地域福祉の専門家・学識経験者である佛教大学社会福祉学部の岡崎祐司教授・芳野俊郎教授、福祉教育開発センターの金田喜弘講師・池本薫規講師にサポートをしていただくことになりました。

ちなみに地域のみなさんの間では、ワークショップ形式での意見収集、地域住民の参加をより深めたいというニーズが当初から高かったのですが、これはかつてワークショップ形式でものごとを検討するプロセスを体験したこと、そしてなによりこれまでの小野郷学区自治会の蓄積や、自治会長を中心に地域ぐるみの取組を大切にしている気持ちが強かったことが挙げられます。

なにを、どうすればいいの？ まずは小さな一歩から。

佛教大学、北区役所、北区社会福祉協議会の協力を得て「小野郷地域まちづくり推進委員会（以下まちづくり推進委員会）」が立ち上げられましたが、最初の一歩をどう踏み出すかが大きな壁として立ちました。地域の主体的な取組が必要なのはわかるが、「まちづくりに向けて何をしたらよいか」「意見を出し合っと思いや希望をまとめるだけで何になるのか」という思いを多少なりとも地域のみなさんがもたれていたことも確かでした。こうした状況の中、小野郷学区の自治会長の「まず目に見えることをしたい」「休耕田をなんとかしたい」という話をきっかけに、「休耕田活用プロジェクト」がスタートしました。

このプロジェクトは、小野郷学区の休耕田に着目し、もち米などを栽培・収穫するとともに地元伝統の納豆餅などを通じて小野郷学区のPRをしていくものです。地域住民自らが取組み、そこに佛教大学の学生のみなさんに参加してもらおうというスタンスで実施したのですが、5月の田植えから始まり、畑作業や流しそうめん、川遊び、秋の芋掘りと稲の収穫などを実施しました。佛教大学学園祭では、収穫したもち米を使った納豆餅、学生が試行錯誤を重ねて提案したサツマイモ料理など、地域住民と学生が協力して小野郷をPRする出店ブースを運営しました。



写真-1 舞台となった小野郷学区の休耕田周辺



写真-2 秋の稲刈りの風景

この取組を振り返ってまず感じられることは、地域の将来に向けて一歩を踏み出すためには、まずは小さなことから、まずは目に見えることから始めていくことの大切さが挙げられるでしょう。まちづくりの取組を考えると、どうしても一つ一つの取組の直接的な成果・効果を求めてしまいがちですが、まずは地域のみなさんが参加し、みなさんが元気になることが大切です。

小野郷学区の取組からは、地域のまちづくりを考える上で大切なヒントをいくつか見ることができますが、大きな刺激であった佛教大学の学生との共同作業がもたらしたものを中心に整理してみます。

地域の良いところをさまざまな視点から見つける場づくり。

この取組に参加した学生のうち、これまで小野郷学区に立ち寄ったことがある学生はほとんどいませんでした。休耕田プロジェクトの中では、田植えや川遊び、納豆餅や地域住民とのグランドゴルフ、サツマイモやもち米の収穫などを実施しましたが、地域の自然・文化・人と触れ合う中で、みずみずしい自然の感覚、地域で作られた野菜などを食べて感じたおいしさ、人と人とのつながりの親密さを肌で感じるなど、まちなかから来た若い世代にとっては新鮮な体験を数多く得ることが出来ました。

また、地域の自然や文化の良さは、日々地域で暮らすみなさんには当たり前になっているものも多いのですが、まちなかから来た若い世代との交流を通じて、小野郷学区の「まちづくりの資源」を引き出してもらうとともに数多く発見することができました。そして休耕田活用での共同作業を通じて、外部の目線から再発見された地域の良いところ、地域の自然・文化・人のつながりなどの「まちづくりの資源」を再認識し、価値あるものとして実感するようになっていきました。

今後のまちづくり、地域の活性化を考える上で、地域のみなさんが自らの暮らす地域の価値を再認識できたことは大きな成果でした。そこでは地域外からの目線、まちなかから来た若い世代の目線が果たす役割は大きいのですが、地域のみなさんが「まちづくりの資源」を自ら価値あるものとして実感するためには、共同作業を通してお互いに感覚を共有すること、地域のみなさん自身も地域のよさを享受する(楽しむ)場づくりが重要であると考えられます。



写真-3 清滝川での夏の川遊び



写真-4 学生の視点から地域の良さを発見

体を動かして、一緒に何かをする機会づくり。

今回のプロジェクトでは、大学・行政などの関係機関も一緒に取組を進めていきました。田植えや収穫などの作業から食事まで、ともに汗を流し同じ時間を過ごす経験を重ねる中で、力を抜いた普段の姿でのコミュニケーションができ、お互いの個性や人柄などに間近に触れることができました。このようにして相互理解や信頼関係が深まっていったのですが、その過程で地域のみなさんと大学・行政などの関係機関のメンバーとの関わり方も少しずつ変わってきました。

当初はどうしても「支援する側／受ける側」、「もてなす側／もてなされる側」という感覚がありましたが、

共同作業を通じて、それぞれの得意な分野を生かして、それぞれの立場から一緒に地域の将来に向けて取り組むメンバーという意識が生まれつつあるように感じられます。地域のまちづくりにおいて外部の関係機関と相互に取組の方向性を共有して効果的な関わりを作っていくためには、今回のような「ともに身体を動かし、同じ作業・同じ時間を共有する機会」は大きな意味を持つと思われます。



写真-5 地域住民と学生と一緒に芋を収穫



写真-6 共同作業で稲刈り

若い世代の関わりが、多くの地域住民が関わるきっかけづくり。

今回の取組では、休耕田での農作業だけでなく、ランドゴルフや流しそうめんといった若い世代と地域のみなさんとの交流の機会も多く設け、運営や作業には体力的に参加しづらい高齢の方にも楽しみながら参加していただきました。また一方で自分の得意なことを生かして運営に協力してくれる方も増えるなど、大変な負担がありながらも地域の中で運営していく輪が広がっています。

地域で取組の輪を広げることは、まちづくりに取り組む多くの地域で課題となっています。小野郷学区では、まちなかから来た若い世代が間に入ることによってさまざまな地域のみなさんが参加しやすくなりました(特に地域福祉を学ぶ学生であったことが大きい)。また楽しく前向きに協力してくれることによって、地域ぐるみで取り組んでいこうという雰囲気作りにも大きな役割を果たしたと思われます。まちなかから来た若い世代の関わりは、地域のみなさんの取組の輪を広げる上でも大きな役割を果たしました。



写真-7 地域住民と学生との交流の一コマ



写真-8 道具の使い方、生活の知恵を教わる。

今回の取組では、今後への希望や地域のみなさん一人ひとりの関わりを深めるなど、まさに若い力が地域を元気付けたといえます。地域の内外を問わず、若い世代との連携を深めていくためには、お互いの立場や得意分野の違いを理解したうえで、どれだけお互いの距離を縮められるか、同じ方向を向いて進んでいけるかがポイントになるのではないかと思います。

事例③ 地域住民と様々な団体、行政がともに行動して 不法投棄問題に取り組んだ <伏見区深草地域>

「～深草発！まちづくりレポート～ みんなで作る 大岩山 森の美術館」

みなさんは、大岩山を歩いたことがありますか？

ゴミがゴミを呼んだ大岩山は、桃山城を望める展望台のある里山へと変わりつつあります。

市民、行政、非営利団体、そして高校生や大学生が積極的に、前向きに行動すれば、まちは生き生きと愛着のある場所へ変わっていくというメッセージを伝えたいと思います。

まず行動。そして感動

京阪藤森駅を降りて、京都市伏見区深草の大岩街道を東へ30分歩くと、標高 182m の大岩山のふもとに着きます。ここはかつて昆虫採集や子どもの遊び場として親しまれる里山でした。ところが、大岩街道の北側に産業廃棄物の処理施設が集まり、野焼きによる悪臭や基準値を超えるダイオキシンなどが問題になった昭和40年頃、大岩街道周辺に家庭ゴミや産業廃棄物が不法投棄されるようになりました。市民からごみの不法投棄の通報を受けて、環境政策局がごみを処理することはありましたが、ごみを拾っては捨てられる状況が繰り返されていました。



転機が訪れたのは平成19年です。地域住民の声を受けて、深草支所まちづくり推進課が夏に現地を調査しました。山道3キロにわたって捨てられている大量のごみを目の前にして、「大岩山をごみ山にしてはいけない」という危機感を深草支所まちづくり推進課は強く感じ、いよいよ対策に乗り出しました。

深草支所まちづくり推進課は、京都市の認定道路と私道の両方にゴミが捨てられている状況を把握し、ひとまず市道に置かれているゴミを拾う計画について、環境政策局等関係課と協議しました。

東部農業指導所を通じて、土地を所有している農家の方たちに協力を呼びかけたところ、ごみ拾いに対する快い返事を得ました。農家の方たちも子供のころ大岩山で遊ぶ思い出を持ち、ごみの惨状を嘆いていたのです。平成19年9月19日にごみ拾いの実施日が決まると、京都市農業協同組合深草支部(JA 京都深草支部)、NPO法人京都・深草ふれあい隊竹と緑(NPO 竹と緑)、深草支所、東部農業指導所、環境政策局循環企画課と廃棄物指導課、伏見・東山・山科・南の各まち美化事務所、伏見土木事務所、さらには伏見警察署の協力も得て約150名集まり、不法投棄一掃作戦に取り組みました。まだ生き残っているやぶ蚊が群がる暑い日差しの中、汗をかきながらひたすらゴミを拾ってみると、なんと半日でごみはすっかり片づき、竹柵の美しい道



へと変わったのです。この変化を目の前にして、住民も行政もともに「自分達でやればできる」という自信とやりがいを感じました。住民と行政の協働のまちづくりにあたっては、どちらか一方だけというのではなく、ともに行動する。そして、ともに手ごたえを感じ、ともに感動しあうことでやる気が出ます。

大岩山ワークショップで集う、拾う、交わる

平成 20 年 2 月「月とうずらの里づくりの会」と深草支所まちづくり推進課が「大岩山ワークショップ」を開き、大岩山を舞台とする市民ぐるみの活動を始めました。初めての大岩山ワークショップでは、市民しんぶん伏見区版でのお知らせやチラシ、口コミによって集まった参加者 90 名が大岩山を歩き、ごみが捨てられている現状を確認しました。歩いた後に意見交換の時間を持ち、大岩山をゴミ山から美しい里山にするという目標を掲げました。



大岩山ワークショップは平成 21 年 3 月までに 14 回開かれ、初回に掲げた目標を達成するために、参加者がさまざまな活動や意見交換を行いました。



大岩山ワークショップに協力した主な人々や団体を挙げます。まず、ワークショップの企画・運営を担った「月とうずらの里づくりの会」。この会は JA 京都深草支部、NPO 竹と緑、深草ふれあい農業体験団の三つの団体で構成されています。さらに、大岩山ワークショップに参加していただいた深草地域 5 学区の各種団体や環境に関心のある区民。授業や研究のテーマとして取り上げていただいた深草地域の学生（主に伏見工業高校、京都教育大学、龍谷大学）。そして、深草支所まちづくり推進課、東部農業指導所、環境政策局循環企画課と廃棄物指導課、伏見・東山・山科・南の各まち美化事務所、伏見土木事務所などの行政機関です。

大岩山ワークショップでは、ごみを拾い、参加者同士で感想を伝え合う交流の場が 7 回ありました。拾っても拾っても追いつかないほどのごみの量に圧倒されながらも、参加者（毎回 50～200 人）みんなで根気よくごみを拾いました。のべ 1000 人が力を合わせた結果、拾い集めたごみは約 100 トンになります。日本では、1 日 1 人あたりのごみの排出量は約 1 キロと言われているので、ごみの量 100 トンは 10 万人が 1 日に出すごみと同じ量になります。それほど大量のごみが大岩山に捨てられており、回収したゴミの中には、ペンキ約 200 缶や古タイヤ約 200 本もありました。



交流の場では、例えば JA 京都深草支部の女性有志の皆様による手作りの豚汁を手に、車座になって参加者が互いに自己紹介をしながら大岩山への想いを語ったこともありました。また、京都ユースホステル協会と社団法人青年海外協力協会近畿支部が深草支所まちづくり推進課へ働きかけた結果、環境保全を学ぶために来日したタイやアフリカ諸国の



青年と地元住民が一緒になって清掃活動を行い、通訳を交えて交流会を開いた

こともありました。両団体は、市民ぐるみの環境保全活動の事例を探していた時に、大岩山ワークショップに参加していた青年海外協力隊経験者を通じて、大岩山ワークショップを知ったそうです。

大岩山ワークショップでは、清掃活動に加えて、このように住民と行政が共通の目標を掲げた、地域内外の人と積極的に出会って、話し合い、学んでいく仕組みを大切にしました。

合言葉は『花と竹、緑の路、深草森の美術館』

平成20年5月、伏見工業高校の生徒たちが「よみがえれ、大岩山」というメッセージを込めた看板を描き、大岩山の山道に立てました。この看板は、伏見工業高校の産業デザイン科の先生が、不法投棄防止の啓発看板をかけたいというNPO 竹と緑からの想いを受けて実現したものです。この看板を見たワークショップの参加者が「既製の看板よりも、人の心に訴える手作り看板を大岩山に増やしたい」と述べたことをきっかけに、深草支所まちづくり推進課が企画した3回連続の看板作りワークショップが、7月から9月に行われました。伏見工業高校の美術の先生のアドバイスをいただきながら、参加者20名がデザインを決めて、色を塗り、出来上がった看板8枚の取り付けを行いました。



看板作りを進める過程の中で、大岩山の活動へ向けた合言葉が生まれました。合言葉は「花と竹、緑の路、深草森の美術館」。大岩山全体を野外美術館に見立てて、花や竹林が心を和ませる、アートや遊び心のある里山を目指す気持ちが示されています。

看板作りワークショップの後に、地域にある深草中学校と藤森中学校へも働きかけ、手作り看板を6枚描いていただきました。その結果、愛着のある手作り看板が14枚、既製の看板を買うよりもずっと安い費用で大岩山に並べられました。お金をかけずに手間をかけたり、活動に楽しい要素を持ち合わせたりするのは、地域住民と行政の知恵の絞りどころでした。

現在大岩山で見られる主な“芸術作品”は看板です。看板のそばにはNPO 竹と緑のメンバーを中心に作られた竹柵が見られます。その他に、大岩山・森の美術館には見守りグッズがあります。たとえば、木の上につけられた監視カメラ。次に、5つの市街灯。山道は夜が暗く、人目に付きにくいことからゴミが投げ捨てられてきましたが、今では夜も山道を明るく照らしています。さらに、大岩山の取組を応援するキャラクターが登場しました。デザインは伏見工業高校の生徒によって描かれました。その後、キャラクターの名前を公募し、64通の応募の中から「がんちゃん」と名付けられました。がんちゃんは、大岩山の活動ニュースやチラシのイラストの中で愛嬌をふりまっています。「着ぐるみも作る？」というアイデアもありますが、実現する機会はまだのようです。



1000人が集まる工夫 ―広報作戦―

どうやって多くの人々に呼びかけたのでしょうか？ やはり一番は、参加者の口コミでした。大岩山ワークショップに参加した方が、大岩山のごみの量に驚き、拾ってきれいにすることに面白さを感じます。そして次回は家族や友達を連れて参加するという光景がみられました。活動を知ってもらうために、大岩山ニュースの発行、テレビ・新聞・ラジオなどマスメディアでの取材、ポスターやゴミの展示会を開きました。ときには、ニュースの原稿を書いてくださる地域住民の方やポスターデザインを描ける学生団体などへ、協力をお願いをするために訪ねたりしました。このように、目標を達成する力となる人材を探すことも大切だと思います。また、「深草ふれあいプラザ」へ参加し、ポスターやチラシを配りました。他団体から声をかけられたら、活動を知ってもらえるチャンスとばかりにお話をするために外に出ました。

大岩山・森の美術館を作る大岩山ワークショップは、誰でも、いつでも、好きな時に参加できる運営方針を取りました。ワークショップは自由参加で、途中参加も歓迎しました。事前申し込みの要らないこの参加の仕組みは、参加者にとって気軽なようでした。そして、ごみを拾うという、誰もができることから始めました。以上のことが、多くの人々が集まる結果に結びつきました。

ごみゼロ活動から自然の魅力を活かす里山活動へ

「ずいぶんときれいになったなあ。」歩くとたびに参加者の方々が口にする言葉です。

深草支所まちづくり推進課では、平成21年度より、定期的な一斉清掃を年に2回実施しています。清掃活動では、大岩山に隣接する深草・藤森・藤城学区の自治会などに呼びかけながら、空き缶やたばこのすい殻などを拾っています。残念ながら、ごくたまにベッドなどの大型ゴミが捨てられているのを発見して胸を痛めますが、それはもはや、大岩山にて常に起こる出来事ではありません。

また、平成21年7月には「深草自然環境再生ネットワーク推進委員会」が立ち上がりました。この委員会では、大岩山ワークショップにて出会った人たちを中心に集まった18名が、大岩山ワークショップで描かれた夢の一つである展望台づくりに取り組んでいます。夢を分かち合うことが、活動の原動力となっています。このように、ごみ拾いに投じられた地域活動の一石が、里山再生という住民の夢の実現に向けた活動として発展し、人々や団体との新たな出会いの輪を広げながら、着実に一步一步実を結びつつあります。

みなさんの地域活動におけるまちづくりのポイントは何かでしょうか？まちづくりのうまくいくコツやポイントを伝え合えば、そこからヒントを得て、個々のまちづくりにはずみが見つかることかと思います。



事例④ 自治連合会がないところに自治連合会をつくった ＜北区紫竹学区＞

「紫竹学区自治連合会が発足するまで…」

平成19年、紫竹学区自治連合会が発足しました。以来2年、以前に比べて学区や各種団体が主催する行事に参加する学区民が増え、協力し合う体制が整いつつあります。

学区にまとまりが見えると、学区の基本である町内会でも、少しずつ今までと違った動きが見られるようになってきました。しかし、ここに至るまでには、様々な問題や葛藤がありました。自治連合会が作られるまでの経緯をまとめてみました。

町内会連合会が学区をまとめる (昭和63年頃～平成3年)

紫竹学区は、京都市北区にあり、堀川通りや北山通りを中心に閑静な住宅街が広がっている地域です。

20年ほど前の紫竹学区は、町内会連合会が学区を統括していました。この頃、学区内には、29の町内があり、町内会連合会をはじめ、12の団体があったようです。

これらの団体の中で、町内会連合会（以下、町連）が学区内での権限を持っていました。

「町連の意見は、学区民の意見であり、町連の傘下に各種団体がある」という考えで、学区の運営が成されていました。各種団体の動きも町連が把握し、団体主催の行事も、町連会長の許可が無いと実施できないことがあり、各種団体長からは、不満の声も出ていました。

当時の町連の会長は、社会福祉協議会や他の団体長も兼務し、色々な面で有力者でした。町連という団体が学区を統括すると言うより、個人的な統括に近い状態だったようです。町連は、学区民からの町内会費を集金する団体でもあるので、個人色が強い町連から報告される収支決算に疑問を持つ町会長も出てきました。これを理由に町連を脱会する町内がありました。（現在も脱退したまま）

団体連絡協議会設立 (平成4年～平成19年)

平成3年、町連会長が亡くなったのを機に学区の体制を見直そうという声が上がりました。今までの町連を中心にした学区運営でなく、自治連合会を立ち上げ、学区を運営しようとする意向が高まり、準備委員会を作ることになりました。

これにより、平成4年、自治連合会設立を目的とした『各種団体連絡協議会』（以下、団体協議会）が発足し、新たな学区の運営がされるようになりました。学区の団体長で構成され、町連も学区内の一団体として、団体協議会に組み込まれました。

一時は、落ち着いた学区運営ができるようになりましたが、年数が経つに連れ、学区運営を円滑にするために設立した団体協議会は、当初の自治連合会を設立するという目的が薄れ、それぞれの団体長が

自団体を存続、維持することに執着する傾向が強くなり、学区全体を見通した活動に繋がりにくくなってきました。そのため、学区民の意見が反映される学区運営ができない状態が続きました。

そんな中、一部の団体長や町連を補佐する立場の者から、「学区運営の中心は町内会であり、各団体は住みよい学区を作るための補佐的立場である」という意見が出てきました。町連の会合で学区民の意見や要望をくみ上げ、それを学区運営や団体主催の行事に反映するべきだという考え方です。この考え方や町連のあり方について、団体協議会で何度も協議されました。

しかし、この意見に反対する団体長もあり、打開案がまとまることなく、町連が団体協議会から脱会することになりました。これに続いて、いくつかの団体が脱会することとなって、学区に統一感がなくなっていました。

紫竹文化振興会の設立 (平成13年～)

団体協議会が主催する「紫竹まつり」は、学区民体育祭、敬老の集いに並ぶ学区3大事業の一つです。しかし、団体協議会が分裂し始め、お祭りを円滑に運営することは、難しい状態でした。

「紫竹まつり」については、以前から、学区民が楽しめる行事にするために、お祭りを主催する特定団体の必要性が論じられていました。そこで、「紫竹まつり」主催を主に、文化的行事を行う組織として、平成13年、「紫竹文化振興会」という団体が新たに設けられました。

市内でも文化振興会がある学区は少ないようです。小学校長をはじめ、学区にあるすべての団体長(PTA会長やスポーツクラブ長も含む)が会員となり、加えて、企画委員として既存の団体に属さない人達が集まりました。

学区内の一団体でありながら、各団体長が一堂に会する特異な組織を作りました。新たな各団の集まりといえます。

企画委員会でお祭りの内容や運営方法の素案を作成し、全体会で協議しながら、みんなが楽しめるお祭りを目指して実施しています。また、より充実した運営を図るため、お祭り当日は、各種団体から2名と町内会長が運営スタッフとして参画します。

町内会長が「紫竹まつり」に係わることによって、「紫竹まつり」が学区全体に浸透し、多くの方が楽しそうに参加している姿が見られるようになりました。

参加者数は、年々増加し、他の文化事業への参加者も増えて、学区民どうしの顔が見えるようになりました。

その後の団体連絡協議会と町連

今まで、町内の行事だけに携わり、団体主催の行事には参加するだけだった町内会長が、お祭りに参画し、積極的な活動をしたことにより、町内会長という役職を自覚を持って任務に当たる人達が多くなったようです。

町連の組織自体も改良され、会合の回数が増えたことによって、学区民の要望をくみ上げ、団体の行事に反映できる体制ができてきました。町内会長から団体の活動を知りたいという声上がり、各団体長が町連の会合で活動報告をして、理解を得るという取り組みもされました。

全員ではないにしても、町内会長になった人達が、自主的に活動しているように見えます。

分裂状態の団体協議会でも、この状態を打開しようとする動きがあり、脱会していた団体も再び団体協議会に入会し、学区全体が落ち着いた状態に戻りました。

紫竹ローマンクラブ(SRC)開設 (平成19年～)

退職して、地域の活動に参加していた方から、趣味のクラブを作りたいという声が上がりました。

当時の町連会長は、趣味のクラブの存在について、

①現在仕事をしている人達にとって、退職後、地域で暮らしていくための助走期間となる。

②クラブで活動することによって、人のつながりができ、色々な行事に参加しやすくなる。

と考え、一個人の意見を学区全体に根付く組織になるよう構築し、多くの賛同を得て開設することになったのが、「紫竹ローマンクラブ(SRC)」です。

基本的に、学区在住の55才以上の者であれば、自由に入会できるクラブです。現在、同好会数は18、会員は174名(男性111名 女性63名)。それぞれのクラブが、工夫を凝らし、楽しく活動をしています。

団塊の世代をターゲットに、趣味を通して人と人のつながりを広げ、さらに町内行事や団体行事への参加、参画につなぐ役目もしています。

例えば、文化振興会主催の料理教室は、SRC料理クラブとタイアップで実施しています。

いよいよ自治連合会発足へ (平成19年～)

町連の組織が整い、団体協議会が和解し、学区全体に落ち着きに戻った頃、前からの懸案だった、自治連合会を立ち上げようとする取り組みが動き出しました。

町内会長と団体長が一つになって、学区を運営することが、より住みよいまちづくりに繋がると、自治連合会設立に賛同する人達が増えていきました。こうして、自治連合会設立に向けて、ようやく本格的な話し合いが持たれるようになりました。

構成員、運営方法、役員などについて、真剣に協議されました。当然のことながら、賛成意見もあれば、反対意見もあります。何回もの協議とねばり強い説得により、やっと自治連合会の骨組みができあがりました。

そして、これに係わる人達の承諾を得て、念願の「紫竹学区自治連合会」が発足しました。各種団体長、4名の町内会長(学区を4つに分けたブロック長)、小学校PTA会長で構成されています。運営方法や役員選出についても十分に検討され、学区全体を見据えた運営がスタートしました。

これに伴い団体協議会は、本来の役目を終え解散しました。

さらなる活性化に向けて…

会長の任期は2年。平成22年度は改選期です。発足以来1期で会長が交代します。この交代は、自治連合会がさらに充実した組織になるための交代と聞いています。自治連合会による学区運営は、これ

からが本番です。機能する組織として紫竹学区に根付いていくためには、これから先の体制づくりが必要です。

そのための構想の一つとして、町連組織を発展的に解消し、組織の単純化を図ることが提案されています。これは、学区運営の中心は町内会という考えから、町内会長全員を自治連合会の構成員とすることです。さらに、一年交替の町内会長から副会長・会計・会計監査を選出し、常に新しい目で事業と財政を診断する体制を作ることも検討されています。

紫竹学区には、解決しなければならない大きな問題が一つ残っています。それは、過去に町連から脱会してしまった一町内がそのままになっていることです。

この町内に移り住むようになった若い人達からは、学区の行事に参加したい、町連に戻ってほしいとの声が上がっています。しかし、町内での意見がまとまっていないため、すぐに解決できる問題ではありません。これも今後は自治連合会で協議され、解決されていくだろうと思います。学区が本当の意味で一つになるには、もう少し時間がかかりそうです。